

教科の目標を実現する手段としての言語活動

—イメージを豊かに感じ取り、表現する手立て—

美術科 西澤 明

1. テーマ設定の理由

平成 23 年度の学校研究のテーマ、「新指導要領における指導と評価の一体化を目指して—言語活動に着目した評価のあり方—」を踏まえ、教科の目標がより充実した形で実現するための手段として、どのような言語活動をどのような形で行っていくかを実践研究することとし、教科の研究テーマを「教科の目標を実現する手段としての言語活動」とした。

学習指導要領に示された美術科の教科の目標は、

第1 目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

とあり、「創造活動の喜びを味わう」、「美術を愛好する心情を育む」、「感性を豊かに育む」、「基礎的な能力を伸ばす」、「美術文化についての理解を深める」、「豊かな情操を養う」とさまざまである。そこで研究の取りかかりとして、それらの中から「感性を豊かに育む」に注目し、学習の活動、指導、評価について具体的にまとめることにした。

感性について、学習指導要領解説には次のように記されている。

「感性を豊かにし」について

中学校美術科で育成する感性とは、様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力(①)であり、知性と一体化して人間性や創造性の根幹をなすものである。また感性は、創造活動において、対象をとらえたり判断やイメージをしたりするときの基になる力として働くものである。美術科は特に、対象のもつ美しさや生命感、心情、精神的・創造的価値といったものについての感性を中核としており、目に見えるものや、目に見えない想像や心、精神、感情、イメージといったものを可視化・可触化(②)できる唯一の教科であるといつてよい。現代の生活においては、柔軟に心豊かにたくましく生きていく視点からも感性の育成の重要性が指摘されており、美術において感性を育てることは極めて大きな意味をもっている。したがって、表現や鑑賞の活動を通して視覚や触覚などを十分に働かせ、これまでの表現や鑑賞の経験なども生かして形や色彩、材料などからそれらの性質や感情、イメージなどを豊かに感じ取る(③)ような学習が重要である。また、感性はその時代、国や地域などに見られる美意識や価値観、文化などの影響を受けながら育成されることから、特に鑑賞では、作品や文化遺産などから、そのよさや美しさ、作者の心情やそれらを大切に守ってきた人々の気持ちや生き方、感謝や畏敬の念及び様々な国や人々が共通にもっている美に対するあこがれなどを感じ取ったり理解したりする学習を積み重ねることが大切である。

※文中下線及び(番号)は西澤

つまり、求められる豊かな感性とは、「①…さまざまな対象・事物からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る」ことや、「③…形や色彩、材料などからそれらの性質や感情、イメージを豊かに感じ取る」ことのような「感じとる感性」と、「②…目に見えるものや、目に見えない想像や心、精神、感情、イメージといったものを可視化・可触化する」ことのような「表現する感性」の2つに整頓できる。そこで副題として「イメージを豊かに感じ取り、表現する手立て」を設定し、その手段としての言語活動を計画、実践することにした。

2. 美術科における言語に関する活動について

学習指導要領では、確かな学力の重要な要素の一つである「思考力、判断力、表現力」をはぐくむ

ために、各教科における「基礎的な知識・技能の習得と活用」を意図した学習活動が重要で、その基盤になるのが「言語に関する能力」だと示された。美術科における「思考力、判断力、表現力」は、指導要領解説書に「美術の基礎的な能力は、思考力・判断力・表現力等を含むものである」と記されているように、その活動の充実によって十分対応できると考えてよいだろう。

美術科の言語活動について学習指導要領で取り上げられているのは、以下に示した「第2 各学年の目標及び内容、2 内容、B 鑑賞、(1)、ア」である。

造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。(第1 学年)

造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能との調和の取れた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと。(第2 学年及び第3 学年)

その説明には具体的に次のような点が記されている。

「生徒が自分が気付いたことや考えたことなどを互いに言葉で説明し合う活動を通して、自分にはない新たな見方や感じ方に気付き、見方や感じ方を広げることである。〔中略〕言葉で考えさせ、その考えを整理させることも重要である。漠然と見ていては感じ取れないことが、言葉にすることによって美しさの要素が明確になり感じ取れることがある。言葉で表現することは見る視点を整理することにもなる。〔中略〕授業の中で「明暗の対比」や「リズム」、「柔らかい色調」などの造形に関する言葉を意図的に用いて説明したり話し合ったりすることで、一人では気付かなかった視点や概念で対象をとらえられるようになることもある。このように、ものの見方や感じ方を豊かにしていくためにも、言葉によって学習を深めることは重要である。その際、対象のよさや美しさ、作者の表現意図や工夫などを感じ取り、考え、さらに他者と意見を交流して見方や感じ方を広げるために、生徒一人一人が感じ取ったことを大切に、自分の言葉で説明し合うことが効果的である。」(第1 学年)

「生徒一人一人が感じ取った作品のよさや美しさなどの価値を、生徒同士で発表し批評しあい自分の気付かなかった作品のよさを発見するなどする。〔中略〕自分の感じたことや作品についての自分の考えを、根拠を明らかにして述べたり批評したりすることは〔中略〕大切な学習になる。また、自分の価値意識を持って批評するためには、自分の中に対象に対する価値を明確に持つことが前提になる。〔中略〕単に知識や作品の価値を学ぶだけの学習ではなく、知識なども活用しながら自分の中に作品に対する新しい価値をつくりだす〔中略〕ことが重要である。〔中略〕各生徒が作品などに対する自分の考えを述べ合うことにより、一人では気付かなかった視点や価値に気付くことができるようになる。そこで気付いたことを更に述べ合うことにより、見方が一層広がり、質の高い〔中略〕活動に発展していくことになる。」(第2 学年及び第3 学年)

ここで注意したいのは、この解説は鑑賞活動の項目に対して記されたものであって、上記の引用文中の〔中略〕には、鑑賞教育であることを特定する文言が多く含まれていることである。確かに、美術の授業において言語が使われる場面は、鑑賞活動において多く考えられるものではあるが、その鑑賞の活動で扱われる対象が「作品」であることは明らかである。対象の作品を通して、表現の「造形要素」や作者の「表現意図や工夫」といった観点を言語で考え、それを「記録」、「要約」、「説明」、「論述」といった活動を行うとともに、そうした一人一人の考えを生徒同士で「発表」し合うことで、「説明し合い」、「話し合い」、「批評し合い」といった双方向の「意見の交流」が行われることになる。こうした言語活動は、作品を制作する表現の活動においてもさまざまな場面で実現が可能なものであり、実際に行われてきている。大切なことは、これまでに行ってきた単元や授業の中で、「言語に関する能力の育成」に関わる活動を意識し、整頓し、よりよい実現のために実

色の分類と感情のまとめ

無彩色	色味のない色…白、黒、灰色。 色味がない＝色相、彩度が無い。 明るさの差はある＝明度はある。
有彩色	無彩色以外の色。 無彩色に少しでも有彩色が加われば、有彩色。
色相	色味のこと。青みの、赤みの、青っぽい、赤っぽいといった言い方をしよう。
彩度	色の鮮やかさのちがひ。有彩色にしかない。 有彩色に無彩色が加われば加わるほど彩度は低くなる。
純色	無彩色がまったく加わらない、もっとも彩度の高い色。 明清色…純色に白が加わった色。 白が加わるということは、白に近付くということ。 ＝明度は高くなり、彩度は低くなる。 暗清色…純色に黒が加わった色。 黒が加わるということは、無彩色に近付くということ。 ＝明度は低くなり、彩度も低くなる。 濁色…純色に灰色が加わった色。 ＝加える灰色の明度によって明度は高くなったり低くなったりする。 でも灰色が加わるということは灰色に近付くので、彩度は低くなる。
明度	色の明るさのちがひ。 すべての色には明度がある。 純色なら、黄>黄緑>緑>青緑>緑みの青>青>青紫 黄>黄みのだいだい>赤みのだいだい>赤>赤紫>紫>青紫

学習した「色の分類の言葉」

無彩色・有彩色、色の三属性（明度、彩度、色相）、明清色・暗清色、濁色、補色といった、多くの学校で取り上げられるスタンダードであり、美術における基礎的・基本的な知識の一つである。しかし単にその言葉を覚えることが目的になるとわかりにくく、なかなか習得しにくいものである。実際の表現活動において説明の言葉として活用することで、その学習の目的が明確になると考えられる。

同単元でこれまでに行ってきたイメージの説明は主観的な側面が強く、受け手側とのイメージの共有が必ずしも一致するとは限らなかった。それを双方が共通して理解している客観的な「言葉」で説明することによって、より具体的なイメージの共有ができる可能性が感じられた。さらに教師が作品の評価をする際にも、これまで色、形といった技術的な評価に偏りがちだったものが、より深い作者の制作意図を知ることができるようになり、作品に対する見方が深まることにつながった。

(2) 鉛筆で表現するイメージ

「レタリング表札」では、双方が共通して理解している客観的な「言葉」を活用して自身の作品のイメージや表現意図を説明する取り組みを行ったが、その成果を踏まえ、「鉛筆で表現するイメージ」では、制作活動における漠然としたイメージを制作の過程において言語化し、それを複数名で意見交換し合うことを目標に実践を行った。「レタリング表札」の言語活動が一方向の説明だったのに対し、お互いが双方向に考えを説明し、伝え合うことをめざした活動である。

研究対象として取り上げた学習は、やはりここ何年か続けている単元である。鉛筆と画用紙という最もシンプルな用具を取り上げ、その基礎的・基本的な知識及び技能の習得、活用によって、美しい形や色彩（濃淡や黒さ）、光（輝き）を表現することが課題の題材である。

しかし、単に知識・技能の習得を図るだけでは、子どもたちが主体的に構想したり表現したりする場面は少ない。鉛筆の特性やその生かし方を際立たせながら、表現活動の広がりを持たせるために、今回は目に見えない（心で感じる）テーマ、例えば感情や季節、視覚以外の五感などを設定させ、そのイメージを表現させることにした。

学習指導要領には、技能に関して指導する事項として「意図に応じて材料や用具の生かし方などを考え、創意工夫して表現する」、「材料や用具の特性などから制作の順序などを考えながら、見通しを持って表現する」と示されており、描画用具としての鉛筆の特性を意識し、それを生かしながら表現することは重要だと考えられる。これを踏まえ、「感性を豊かに育む」という教科の目標との関連を図るために、以下の活動を単元の柱として設定することにした。

- 活動Ⅰ 鉛筆（材料）による、形、色彩などの表現技術を学び、そこから感情、イメージなどを豊かに感じ取る活動。
- 活動Ⅱ 感情や季節、視覚以外の五感など、目に見えないテーマを考え、そのテーマから想起されるイメージを言語化する活動。
- 活動Ⅲ 形や色彩、材料などの表現技術からイメージを感じ取る活動（活動Ⅰ）を、意図した感情やイメージを言語化する活動（活動Ⅱ）と結びつける活動。

言語活動については、鉛筆による様々な技法や表現の工夫をする（場面Ⅰ）、テーマで表現したいイメージと鉛筆の表現から受け取るイメージを結びつける（場面Ⅱ）という 2 つの場面において、「言語化し、説明する」「活動を行う」ことで対応している。さらにその「説明」を、友人との意見交換の形態で行うことによって、言語活動はより深まると考えた。

単元の具体的な内容については以下のように整頓した。

① 単元の概要・ねらいと培いたい学力

- ・絵を描く用具としての鉛筆に関心を持たせるとともに、鉛筆の幅広い表現効果を用いて、目に見えない（心で感じる）テーマを、美しい形や色彩（濃淡や黒さ）、光（輝き）を用いた抽象的な平面構成で表現させる。
- ・活動を通して、鉛筆の基礎的・基本的な知識・技能の習得と、その技法や表現効果を生かし、創意工夫しながら、表現する能力を育て、目に見える形や色彩、光などからそれらの性質や感情、イメージなどを感じ取り、その効果を目に見えない想像や心、精神、感情、イメージといったものの可視化に活用する感性を育てる。

② 単元の観点別評価内容

●関心・意欲・態度

鉛筆の基礎的・基本的な知識・技能に関心を持ち、その技法や表現効果を生かして、イメージや意図を表現しようとしている。

●発想・構想の能力

鉛筆の様々な技法や表現効果を生かして、表したいイメージや意図に応じた構想を練っている。

●創造的な技能

鉛筆による形や色彩（濃淡や黒さ）、光（輝き）の幅広い表現を身に付け、表したいイメージや意図に応じた創意工夫をして表現している。

●鑑賞の能力

参考作品や友人の作品から、造形のよさや美しさ、作者の意図や表現の工夫などを感じ取り、味わっている。

③ 学習の流れと生徒の活動

学習の流れ	生徒の活動
① 導入 鉛筆の基礎的・基本的な知識及び技能の学習 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 鉛筆画作品（過年度生徒作品，作家作品）の鑑賞。 鉛筆をカッターナイフで削る。 基本的技法（硬度，筆圧，速度，角度）と表現効果の学習。
② 制作Ⅰ 様々な技法や効果の工夫 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 基本的技法と効果を組み合わせ，より多様な色彩（濃淡や黒さ），光（輝き）の効果を工夫する。 技法の情報交換（言語活動Ⅰ）。
③ 制作Ⅱ テーマの決定 イメージを表す創意工夫と表現 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> 作品のテーマを決定し，そのイメージを考える。 幅広い技法とその効果を用いて考えたイメージを視覚化，表現する。 イメージを表現する創意工夫の意見交換（言語活動Ⅱ）。
④ まとめと鑑賞 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 額装，展示と鑑賞。

④ 指導上のポイント，留意点

- 「導入」時のポイント，留意点
- 鉛筆画作品の鑑賞では子どもたちは描写力に目を向けがちだが，できるだけ様々な技法の作品を部分拡大図で提示し，鉛筆の技法と表現効果に注目させる。
- 鉛筆をカッターナイフで削る活動では，“削る”技能の習得と同時に，基本的な用具であるカッターナイフ（刃物）自体の構造や正しい扱い方について学習する。
- 基本的技法の学習では，表1，2，3のまとめを実際に試しながら行う。

効果を得るための技法と内容		得られる視覚的效果
硬度を変える	硬い	薄い，細い
	軟らかい	濃い，黒い，太い
筆圧を変える	強い	濃い，黒い，（太い）
	弱い	薄い，（細い）
速度を変える	早い	速さや勢いといった
	遅い	感覚的な効果
角度を変える	先端	細い
	側面	太い

表1 鉛筆の基本的技法と視覚的效果

効果を得るための方法と内容				
描かれる線による効果	線の間隔を変える	広い	線の重なりの有無	
		狭い		
	線の長さを変える	長い		
		短い		
	線の向きを変える			

表2 線による効果と方法①

効果を得るための方法と内容		
その他の効果	描画前	用紙・紙質（描画面）を変える
		描画面を加工する
	描画後	消す（消しゴム，練りゴム等で）
		擦る（ぼかす）
		削る，引っかく
	その他	芯を砕いて使う，濡らすなど

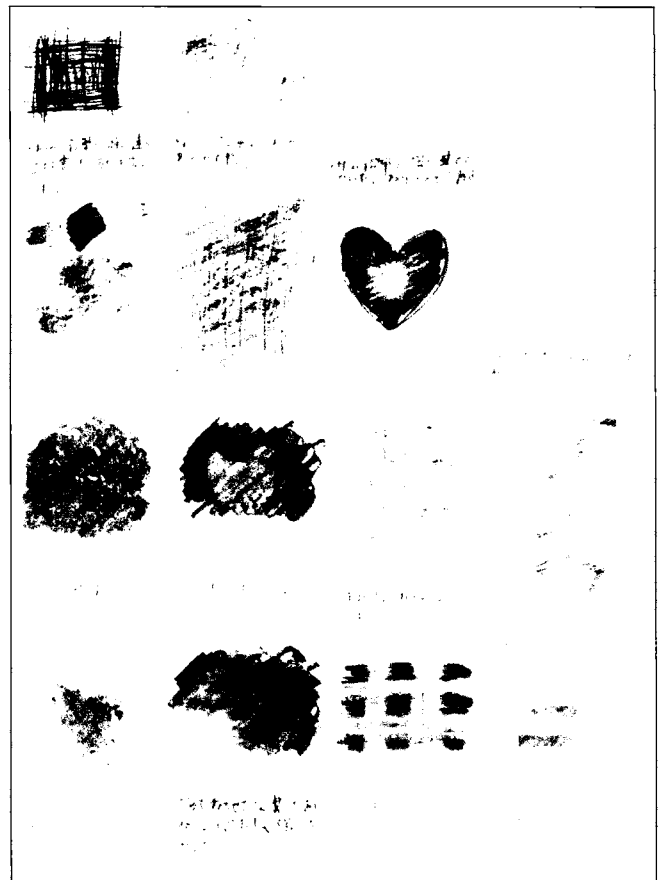
表3 線による効果と方法②

● 「制作Ⅰ」時のポイント、留意点

前時までに学習した基本的技法のまとめを組み合わせてより複雑な表現を工夫させ、考えた工夫をグループ内で発表、意見交換を行う（言語活動Ⅰ）。その際、基本的な技法をまとめた「表 1, 2, 3」を用いる。これは発想の糸口になると同時に、言語による説明に用いる語彙として活用できる。

● 「制作Ⅱ」時のポイント、留意点

作品のテーマについては、鉛筆の特性やその生かし方を際立たせながら、表現の広がりを持たせるために、目に見えない（心で感じる）テーマ、例えば感情や季節、視覚以外の五感などを設定させる。さらに、そのテーマから想起するイメージを考えさせ、「制作Ⅰ」で鉛筆のさまざまな表現技法と効果から受けたイメージと共通するものがないかを考えさせながら制作を進める。ある程度構想がまとまり、実際の制作に取り掛かった時点で、グループで意見交換を行う（言語活動Ⅱ）。

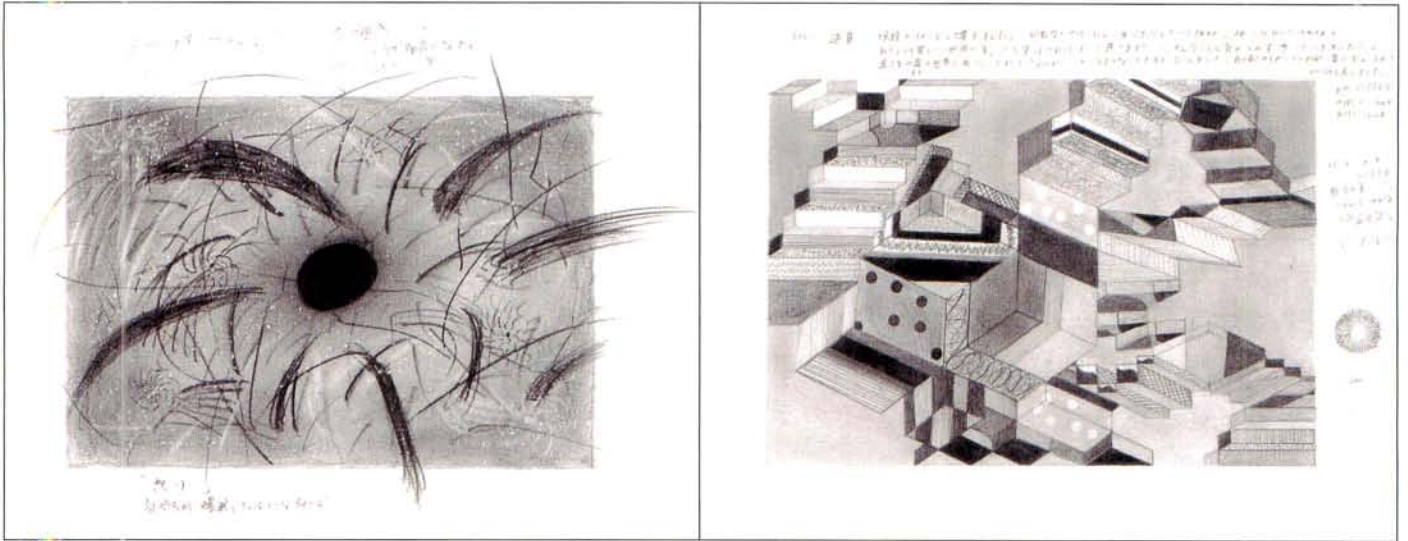


基本的技法の学習のワークシート

単元評価規準表

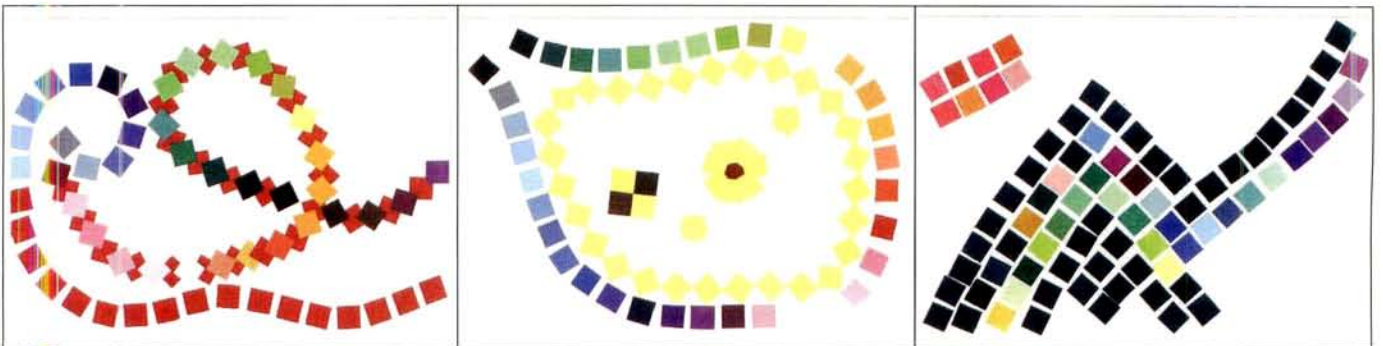
時数	主な学習活動	美術への 関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
2	<ul style="list-style-type: none"> 鉛筆で描かれた作品の鑑賞 鉛筆をカッターで削る技術の学習 鉛筆の基礎知識の学習「硬度・筆圧・速さ」など 	<ul style="list-style-type: none"> 鉛筆の基礎的・基本的な知識及び技能に関心を持ち、鑑賞作品の技法や表現効果を主体的に考えようとしている。 			<ul style="list-style-type: none"> 参考作品から鉛筆の技法や表現効果を見つけ、美しさや表現の工夫などを感じ取り、見方を広げている。
2	<ul style="list-style-type: none"> 鉛筆の基本的技法の学習「線の組合せ」など 様々な効果を表現する技法の工夫 工夫した技法の情報交換 作品テーマの決定と、形や色彩、光によるイメージ表現の構想 	<ul style="list-style-type: none"> 鉛筆による技法や表現効果を主体的に創意工夫し、形や色彩（濃淡や黒さ）、光（輝き）の幅広い表現効果を作ろうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 鉛筆による技法や表現効果の生かし方を考え、形や色彩（濃淡や黒さ）、光（輝き）の幅広い表現効果の構想を練っている。 鉛筆の技法や表現効果を生かしたテーマやイメージの構想を練っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 鉛筆による技法や表現効果を創意工夫し、形や色彩（濃淡や黒さ）、光（輝き）の幅広い表現を創造している。 	<ul style="list-style-type: none"> 創意工夫した鉛筆の技法や表現効果の説明をするとともに、意見交換を通して、自分になかった他者の視点や考えに気付き取り入れる。
3	<ul style="list-style-type: none"> 幅広い効果による形や色彩（濃淡や黒さ）、光（輝き）の創意工夫と表現 意図したイメージを表現するための技法や表現効果の意見交換 	<ul style="list-style-type: none"> 形や色彩（濃淡や黒さ）、光（輝き）の効果を生かして、主体的に表したいイメージや意図に応じた工夫をし、表現しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な鉛筆の技法や表現効果を生かして、伝えたいイメージの構想を練ろうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 鉛筆による形や色彩（濃淡や黒さ）、光（輝き）の幅広い表現を身に付け、表したいイメージや意図に応じた創意工夫をして表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> 意図したイメージを表現するための技法や表現効果の説明をするとともに、意見交換を通して、自分になかった他者の視点や考えに気付き取り入れる。
1	<ul style="list-style-type: none"> まとめ 台紙に貼り、作品を相互鑑賞 	<ul style="list-style-type: none"> 友人の作品から、造形のよさや美しさ、作者の意図や表現の工夫などを主体的に感じ取ろうとしている。 			<ul style="list-style-type: none"> 友人の作品から、造形のよさや美しさ、作者の意図や表現の工夫などを感じ取り、自分の思いや考えを持って味わっている。

このように、イメージの言語化やその共有を説明、意見交換で行うことによって、漠然と取り組みがもたらした表現活動がより具体的かつ深いものになったように思う。グループによる意見交換のあとも、作品の余白部分に自身が気付いたことや変更したことなどを書きとめさせてみたが、それは完成後の作品を評価する教師にとっても、生徒が制作の過程でどのようなことを考えていたのかを知る情報にもなり、有効なものであった。



4. まとめと今後の課題

表現活動に関わる基礎的・基本的な知識・技能を語彙としてまとめ、意図したイメージを言語化する際の拠り所にする試みは、漠然とした自身の構想を整頓することに役立つだけでなく、他者と意見交換をする際に、相手によりよく伝えるための方策としても有効であるように思う。そうした活動は、そのまま制作意欲の向上や作品の表現の深化にもつながっていく。実際に本論で取りあげた題材意外にも、自分のイメージを色、クラスのイメージを形で表す題材において言語による説明を行ったが、これもこれまで行ってきた同じ実践と比べ、作品の質が上がったように思う。



教師にとっても、活動の途中で支援を行う際に生徒の考えていることがわかれば的確な助言ができ、作品完成後の総括的な評価においても、個々の生徒の意図を理解した評価を行えるだろう。

今後の課題としては、生徒が言語化するイメージを、ある一定の規準まで引き出し、思考を深化させるための評価基準を明確にする必要がある。評価基準を明確にすることで、言語化のための手順や思考の方法がより具体的になってくると考えられるからである。